

# 放課後等デイサービス利用者のニーズについての検討

— アンケート調査の結果と考察から —

## A Consideration of the Needs for Families with Disabilities in After-School Care Service

江上 瑞穂<sup>1</sup> 田村 光子<sup>2</sup>

本稿では、近年、障害児者の利用が増加傾向にある放課後等デイサービスを取り上げ、サービスが障害のある子どもやその家族にどのような役割を果たしているのかを明らかにするためにアンケート調査を実施した。アンケート結果を通して、サービス利用は子ども自身の育ちのためだけでなく、家族全体の日常生活のゆとりへとつながっていることがわかった。また放課後等デイサービスには障害のある子どもの社会経験や人間関係を広げる体験、社会全体が障害のある子どもへの理解を広げる役割が期待されていた。さらに、卒業後も継続的にサービスを利用していきたいという願いがあることがわかった。

キーワード：放課後等デイサービス、家族のニーズ、アンケート調査

### 1. はじめに

現在、放課後等デイサービスは、知的障害から肢体不自由、発達障害などさまざまな障害に対してサービスを提供している。また、利用児童の年齢層も、他の日中一時支援サービス等との併用を含めれば、幼児期から高校生までの幅広い年齢層の子どもたちが利用しているのが現状である。

筆者である江上は、放課後等デイサービスで仕事をしてきた経験から、利用児童の家庭環境について、共働きや母子（父子）家庭、生活保護世帯等様々であり、そのような子どもたちや家族と関わる中で、家庭の状況によって学校への通学のみでなく、サービス利用状況にも変化がみられることを実感してきた。江上は、母子家庭の利用児童の支援の中で、利用児童の体調不良等により通学や利用回数が減少し、その後、母親が仕事を辞めたことが影響したのか、利用料の滞納が発生し、そのまま利用停止してしまう経緯をたどった経験があった。背景に家庭状況の変化が影響していると考えたが、家族に

連絡をとり介入を図っても、利用児童本人、および家族からの依頼や相談がなければそれ以上の対応は難しい。また他の多くの利用児童・家族から多様な利用需要がある中で、一つの利用がなくなれば、他の利用を増やすといった対応に終始してしまうのもサービスの実態である。この家族との関係が途切れてしまう中で、利用児童、また家族に対して、もっと何かできたのではないかと、何もできなかったことについて、至らなさ、もどかしさを感じた。

近年、放課後等デイサービスの提供事業者の数も増加し、また、障害のある子どもをもつ家族による放課後等デイサービスの利用需要も増加している。そこで、放課後等デイサービスが障害のある子どもやその家族にどのようなメリットをもたらしているのか、またサービスの改善点について保護者の考えを参考に、放課後等デイサービスとして何ができるのか、求められていることは何なのか等、家族支援における放課後等デイサービスの役割について検討することを目的にアンケート調査を実施した。その

1 千葉県立湖北特別支援学校講師・植草学園短期大学特別支援専攻科修了生

2 植草学園短期大学

結果と考察から、改めて、障害のある子どもたちの家族支援について検討したいと考えている。

## 2. 調査について

### (1) 調査概要

千葉市・船橋市の放課後等デイサービスを提供している3事業所に協力を仰ぎ、利用しているご家族に協力を依頼し、アンケート調査を実施した。本アンケートは、本学研究倫理基準に則り作成、実施した。調査期間は2015年11月18日～12月10日、各事業所で配布・回収を依頼した。配布数は、A事業所40部、B事業所40部、C事業所20部の計100部を配布し、回収数はA事業所19部、B事業所28部、C事業所9部の計56部（回収率56%）であった。

### (2) 結果と考察

#### ① 回答者について

100部配布の56部回収のうち、回答者はすべて母親であった。家族構成からみて、ひとり親世帯は2%と少なく、核家族か祖父母、またはそのどちらかと同居している家族が多いが、回答者はすべて母親である。近年、母親も非正規雇用で働くなど共働き世帯が増えている中で、家族負担を考えると、母親の占める割合が高いのではないかとということが窺える。

#### ② 家族構成について（図1参照）

家族構成では、核家族が最も多く8割以上を占め

ている。その中でも、子どもが2人いるという家族が約半数を占めており、その中には、子ども2人も障害児であるという家族もあった。また、父親はいるものの海外赴任中であるということで、実質母親1人で子育てをしているというような家族もあった。

#### ③ サービス利用児の障害種別・学年・所属について（図2参照）

回答者56名のうち3名が未回答で、53名の回答を得た。また、障害種別を以下のように分類した。兄弟等も含め57名の障害種別について回答を得た。障害種別については、回答者により個々それぞれであるため以下のように大きく7つに分類した。アンケート対象となった障害児のうち、多くが知的障害および発達障害を伴う利用者であることがわかった。サービス利用児の所属校と学年（学部別）については、特別支援学校に所属する子どもたちが最も多く、学年は小学部の子どもたちが半数以上であった。中学部、高等部に所属するサービス利用児についても20%以上の回答を得ることができた。

#### ④ サービス利用頻度について（図3、図4、図5、表1参照）

サービスの利用頻度について、まずは放課後等デイサービスの利用頻度（図3）について調査した。対象児57名中、4名の対象児が複数の放課後等デイサービスを利用していた。それらの利用も併せて、利用頻度を処理したところ、以下のような結果と

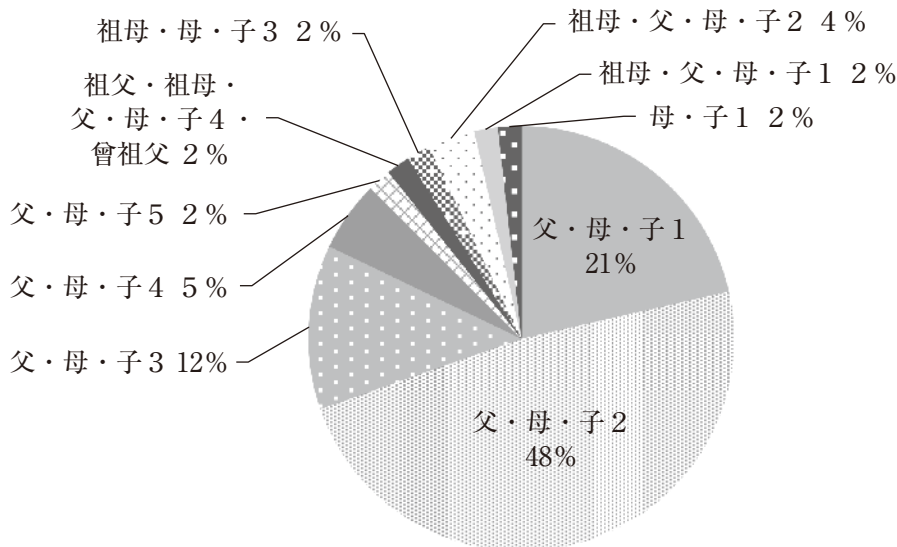


図1 家族構成（回答者56名）

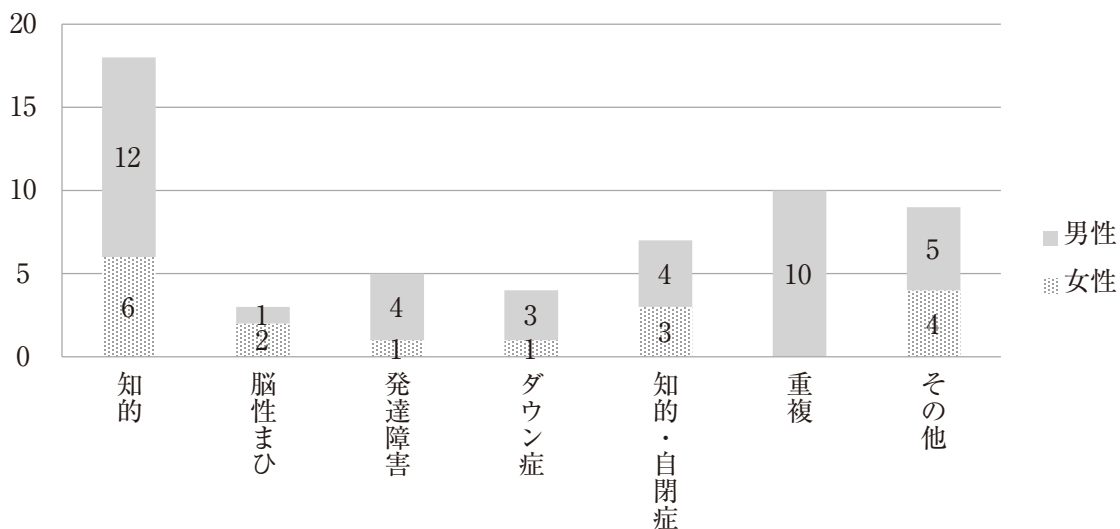


図2 障害別に見た人数 (回答者53名、対象児57名)

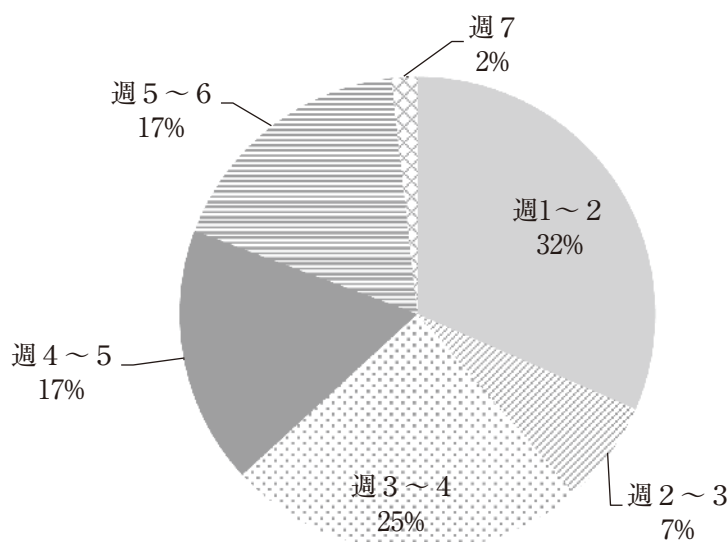


図3 放課後等デイサービス利用頻度 (回答者56名 対象児57名)

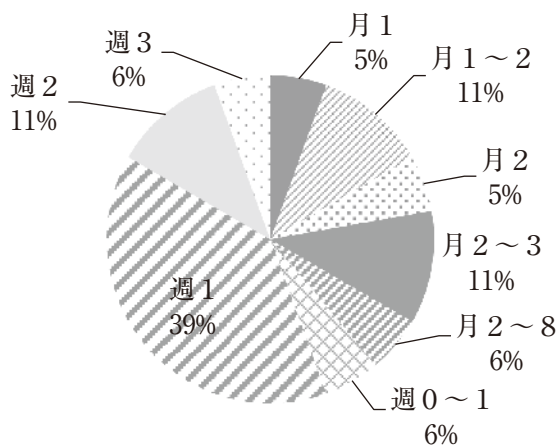


図4 日中一時支援サービス利用頻度 (回答者56名 対象者57名 利用児18名)

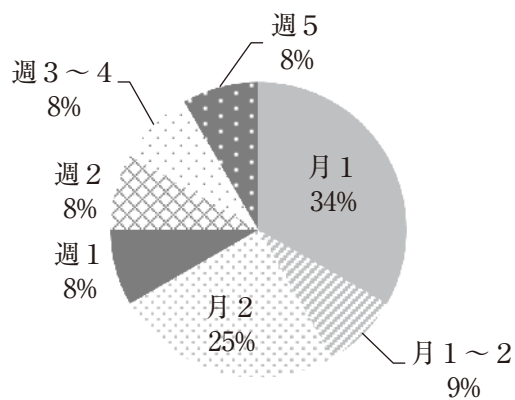


図5 移動支援サービス利用頻度 (回答者56名 対象児57名 利用児12名)

なった。週1～2の利用者が約30%を占めるが、それ以上の利用者が多く、週4以上の利用者も30%以上を占めていることを確認した。

また、その他の障害福祉サービスの利用についても質問したところ、回答者56名、対象児57名中、日中一時支援サービスを利用している対象児が18名、移動支援サービスを利用している対象児が12名であった。

日中一時支援サービスを利用している対象児18名(図4)のうち15名が、放課後等デイサービスの利用頻度が週1～3にあたる回答者であることを踏まえると、多くの子どもたちが週のほとんどでサービスを利用していることが確認された。

移動支援サービス(図5)については、月1～2回のサービス利用が多く、他のサービスと併用しながら利用していることが確認された。

その他のサービス利用(表1)については、回答者56名中、4名からその他の利用があると回答を得た。それぞれ、短期入所事業(ショートステイサービス)の利用、音楽療法、行動援護事業、心身障害

表1 その他のサービス利用(回答者56名中4名)

短期入所事業	年2～3日
音楽療法	月1回
行動援護事業	2～3ヶ月に1回
心身障害者一時介護事業	週1回

者一時介護事業の利用が確認された。多様なサービスを組み合わせて利用している家族がいることも確認された。

#### ⑤ 放課後等デイサービスの利点(図6参照)

放課後等デイサービスを利用して良いところ、利点についての複数回答可で回答を得たところ以下ようになった。回答者は56名中55名から回答を得た。

回答内容は、「サービスの提供状況について」以下7項目、「室内や外の環境がよい」「サービスの方針がよい」「サービスの規模や1日の利用定員の数がよい」「サービス内容がよい」「緊急時に対応してくれる」「サービス利用における金銭的負担が適当」

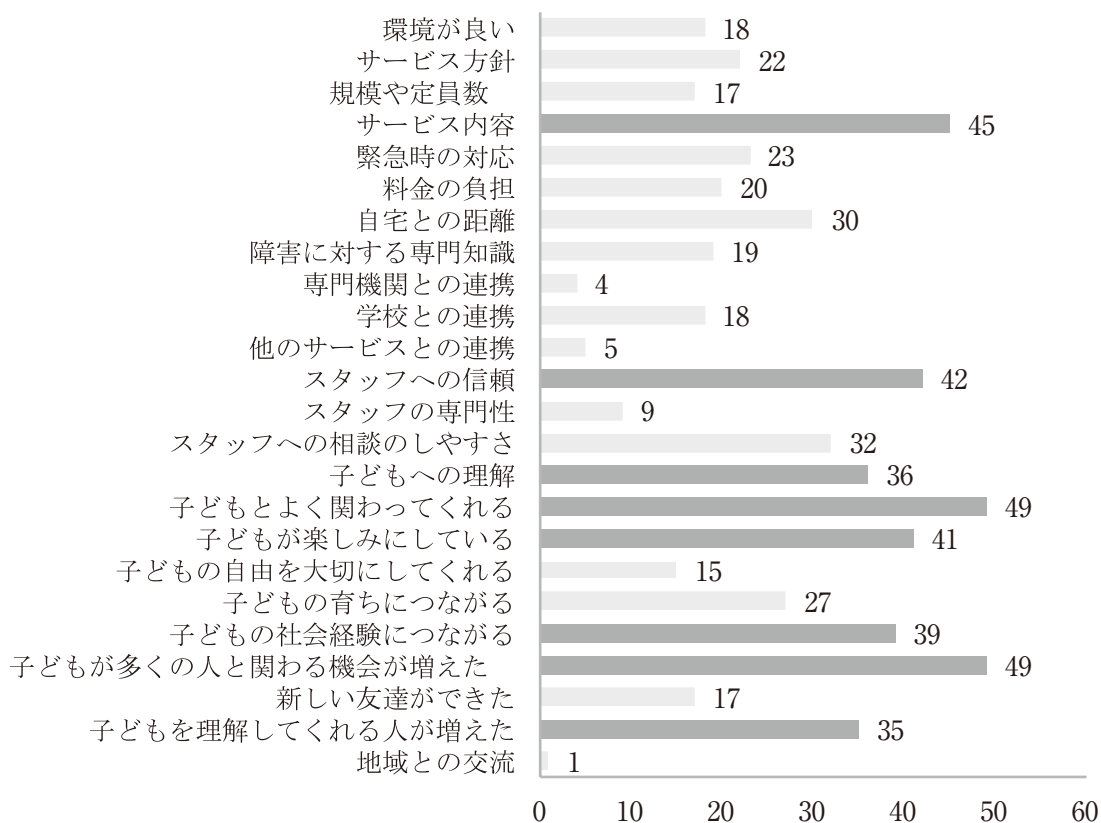


図6 放課後等デイサービスの良いところ・利点(回答者55名)

「自宅とサービス提供場所の距離が比較的ほど良い」、「専門知識や専門機関との連携について」以下4項目、「支援において障害に対する専門知識がよく生かされている」「専門機関と連携協力している」「学校と連携協力している」「他の専門機関やサービスとの連携協力ができている」、「スタッフの信頼感・専門性について」以下5項目、「スタッフが信頼できる」「スタッフの専門性が高い」「スタッフが相談しやすい（話しやすい）」「子どものことをよく把握し、理解してくれている」「子どもとよく関わってくれる」、「お子さん自身の成長とその利点について」以下8項目「子どもが楽しみにしている」「子どもの自由を大切にしてくれる」「子どもの育ちにつながっている」「子どもの社会経験が広がっている」「子どもが多くの人と関わる機会が増えてよい」「サービスを通して子どもに新しい友達ができ」「サービスを通して子どもについて理解し、支えてくれる人が増えた」「サービスを通して子どもが在住する地域の人々との交流が増えた」とした。

結果は以下のようなものであった。「サービス提供状況について」では、「サービス内容」を重視している家族が多く、サービス提供事業所との距離についても重視している家族が多かった。「専門知識・専門機関との連携について」は、一定の回答は得たものの、重視している家族が少なかった。「スタッ

フへの信頼感・専門性について」では、「スタッフが信頼できる」の回答が高く、また「子どもとよく関わってくれる」ことによって信頼度、サービスへの満足度が高くなっていることが確認できた。「お子さん自身の成長とその利点について」では、放課後等デイサービスが「子どもの社会経験を広げる」役割や、「多くの人との関わりが持てる機会」になっていること、「サービスを通して障害のあるお子さんについて理解し、支えてくれる人が増えた」と考える家族も多いことがわかった。

放課後等デイサービスの利用は、家族支援の視点や専門的な療育の枠組みを超えて、障害のある子どもたちの社会経験や人間関係、社会における理解を広げる役割を実感・期待している家族が多いことが確認できた。

⑥ 放課後等デイサービス利用による家族の負担軽減について（図7参照）

放課後等デイサービスの利用による家族の負担軽減について複数回答可で回答を得たところ以下のようになった。回答内容は「経済面での負担軽減について」以下3項目、「安心して仕事に行くことができる」「サービスのための金銭的負担が大きくなり安心して」「ほかの兄弟の教育費や習いごとなどの出費に余裕ができた」、「育児・介護負担の軽減について」の以下6項目、「ほかの兄弟とゆっくり

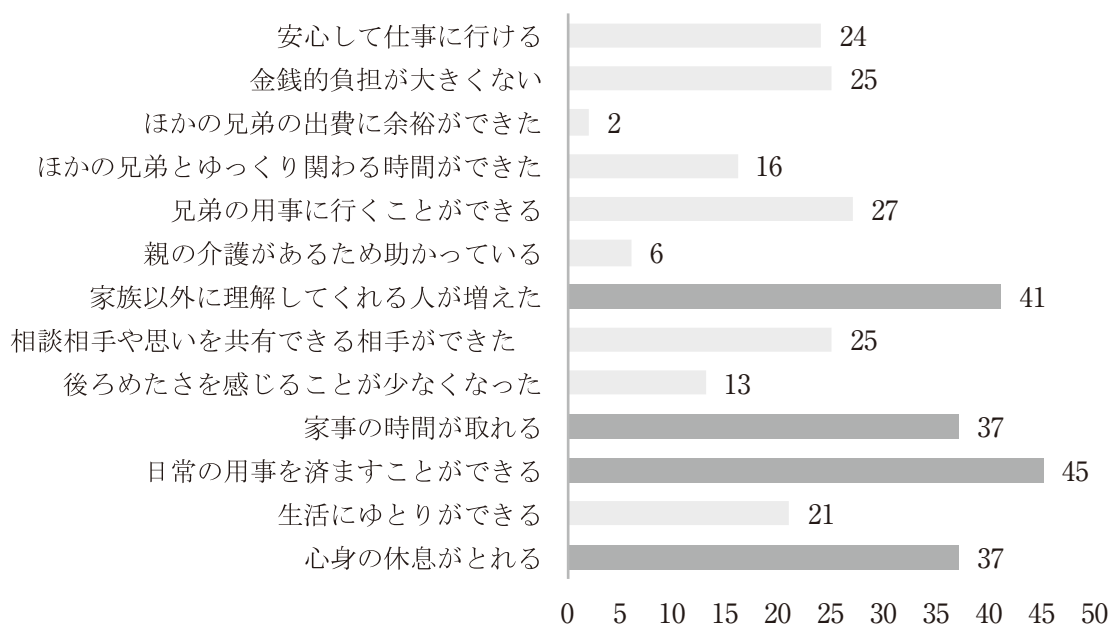


図7 家族の負担軽減（回答者56名）



関わる時間が持てるようになった」「兄弟に用事に行くことができる」「親の介護があるため助かっている」「家族以外に子どもを理解してくれる人が増えてよい」「子どもの支援について相談相手や思いを共有できる相手があった」「サービスを利用することに対しての後ろめたさを感じるようになった」、「日常のゆとりについて」の以下4項目、「家事の時間がとれる」「日常の用事を済ませることができる」「生活にゆとりができる」「心身の休息がとれる」とした。

結果からは、「家事の時間がとれる」「日常の用事を済ませることができ助かっている」「心身の休息がとれる」など、家族の日常生活のゆとりに関する項目に多くの回答を得た。これらは、サービスが家族支援につながっていることを示している。

また、「家族以外に子どもを理解してくれる人が増えてよい」「兄弟の用事にいくことができる」「子どもの支援について相談相手や思いを共有できる相手があった」など、障害のある子どもへの理解、また障害のある子どもを育てる家族への理解、支援につながっていることが示された。

経済面での負担軽減に関する回答は平均的であったが、「安心して仕事に行くことができる」「サービス利用についての金銭的負担が大きくなる

安心して利用できる」など、サービスを利用することで安心して働くことができ、また収入におけるサービス利用費の負担も適当であることがわかった。

#### ⑦ 放課後等デイサービスの改善点（図8参照）

放課後等デイサービスを利用して感じる改善点について複数回答可で回答を得たところ以下ようになった。回答者は56名中55名から回答を得た。

回答内容は、「サービス提供について」以下7項目、「もっと広い場所で預かってほしい」「もっと施設内の清潔に努めてほしい」「施設内外の安全面に心配がある」「サービスの方針がよくわからない」「緊急時など利用したい時に、手続きや定員などの理由で利用できず困ったことがある」「サービス内容を改善してほしい」「家の近くに、希望に沿う支援・サービス先がなかなかない」、「専門知識・専門機関との連携について」以下3項目、「専門機関との連携に努めてほしい」「学校との連携協力を進めてほしい」「他のサービスとの連携協力を努めてほしい」、「スタッフの信頼感・専門性について」以下4項目、「預かってくれるスタッフの人柄がよくわからないため心配」「預かりの様子をもっとよく伝えてほしい」「預かってくれるスタッフに相談しにくい（話しにくい）」「スタッフにもっと専門性を高めてほしい」、「子どもの支援について」以下6項

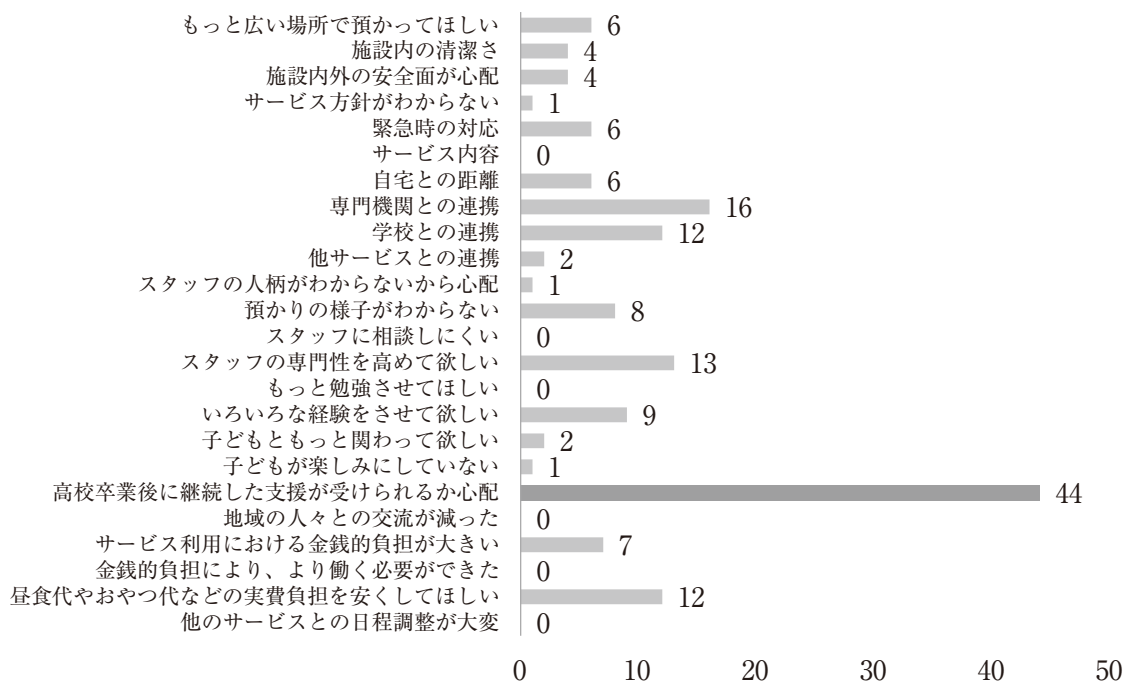


図8 改善点（回答者55名）

目「もっと勉強させてほしい」「もっといろいろな経験をさせてほしい」「子どもにもっとよく関わって欲しい」「子どもがあまり楽しみにしていない」「高校卒業後に継続して同じような支援が受けられるか心配」「サービスを利用することで、日頃触れ合っている地域の人々との交流が減った」、「ご家族の負担軽減について」以下4項目、「サービス利用における金銭的負担が大きいので、もう少し安くしてほしい」「サービス利用における金銭的負担により、より働く必要ができてしまった」「昼食代やおやつ代、その他の実費負担をもう少し安くしてほしい」「他のサービス事業所との利用日程の調整に苦労している」とした。

結果からは、圧倒的に「高校卒業後に継続して同じような支援が受けられるか心配」という保護者の声が高く上がっていた。先にも示したが、家族にとって、放課後等デイサービスの利用は、家族支援の視点を超えて、障害のある子どもたちの社会経験や人間関係、社会における理解を広げる役割を期待しており、こうした機能が卒業後のサービスにも期待されていることがわかる。また、障害のある子どもをもつ家族にとって、放課後等デイサービスを利用できる学齢期のみが子育ての期間ではなく、子どもが学校を卒業し、成人してからも、継続した子育て支援のサービスが必要とされていることも理解できる。

その他の回答では、専門知識や専門機関との連携に期待する声や、昼食代やおやつ代などの実費負担をもう少し安くしてほしいという声も挙げられた。

#### ⑧ 自由記述欄からの保護者の意見

アンケート調査の最後に、「現在の支援・サービスの課題だと感じる点を改善するためにどうしたら良いか、また期待することや希望することは何か」について尋ね、自由に書いてもらった。

その中で最も多かったのは、高校卒業後の進路である。先の改善点でも圧倒的に卒業後の進路が心配であるという保護者の声が多かったが、「高校を卒業し大人の生活になった時、夕方や休日の過ごし方が難しい」「行く先があるのか不安」「親亡き後の生活を本人の年金内で生活できるのか」等、子どもへの不安の声が多くあった。しかし、子どもだけでなく保護者自身も、子どもの施設への送迎で働くこと

もままならず、障害のある子どものためだけの生活になり、親の方が社会から隔絶されてしまうのではないかと不安になるという声も挙げられた。

また、保護者や家族の体調不良や感染症など緊急時に利用できないことがあることが大変との声もあった。感染者の部屋を別にしたり、スタッフが個別に対応したり、他に利用している人にも不安を与えてしまうということを理解したうえで、それでもどうしても仕事が休めなかったり、家族の中で感染者が出てしまった時に利用できるようなになればとても助かるという声があった。

放課後等デイサービスだけでなく他のサービスも併用し、週のサービス利用頻度の高い家族が多い中でも、土・日・祝日も利用できる放課後等デイサービスがあると良いという回答があった。しかし、そのような中でも、「1週間毎日サービス利用することがその子の幸せであるとは限らない。まずは親子関係を築くことが大切であり、サービスに頼りきりになることは親を放棄しているような気がする」というようなサービスを利用することへの後ろめたさとは別に、子育てをする親としての思いが感じられる回答もあった。その他、スタッフの専門性を求める回答や、個別支援計画を実施するにあたり学校や他の専門機関等との連携を希望する声、将来を見越した療育プランの作成などの意見が挙げられた。その中には、放課後等デイサービスが増えてきたことにより、「サービス内容に納得できなかったらやめる」というような選択ができるようになったという回答があった。今までは、定員により利用できないということがあったが、今は放課後等デイサービスが増えたことにより、親がサービスを選べるようになってきているということがわかった。

### 3. 放課後等デイサービスが家族支援に果たす役割

アンケート結果を通して、放課後等デイサービスの利用について、またその役割はいくつかの注目すべき視点があることがわかった。まず、サービスの利用頻度についてである。週1～2回の利用者が32%であったが、その他の日中一時支援サービスや移動支援サービス等の利用についても踏まえると、多くの子どもたちが週のほとんどをサービス利用し

ているということである。自由記述欄では、「毎日利用することがその子の幸せであるとは限らない」という声も得ることができたものの、「高校を卒業してからも継続的に支援が受けられるか心配」という声が多数を占めていることを踏まえると、障害のある子どものいる家族の生活のスタイルの中にサービス利用が形式化し、サービスがなくなることが将来の生活不安を導く要因となっていることも示されている。放課後等デイサービスの利用によって「家事の時間が取れる」「日常の用事をすませることができる」といった家族全体の日常生活のゆとりへとつながっていることも明らかである。「安心して仕事に行ける」「金銭的に負担が大きくない」など、障害のある子どものいる家族においても、主たる介護者である母親が仕事をもつことが当たり前になってきた中で、サービス利用によって、家族が社会に出て働きに出ることができることは、障害のある子どものいる家族の経済負担を軽減させることに繋がっているのではないかと。さらに自由記述では、「子どもの施設の送迎で働くこともままならず、障害のある子どものためだけの生活になり、親の方が社会から隔絶されてしまうことへの不安」も語られている。経済的不安だけでなく、障害のある子どもをもつ保護者の社会からの孤立を解消する役割も大きい。一方で筆者、江上が経験した、本稿冒頭で語ったケースのように、サービスから逸脱してしまうことによって、家族の抱える問題が見えなくなってしまうケースも多くある。サービス事業者は、利用者家族がおかれている生活背景も踏まえた家族支援の視点を持ちながら、利用者への継続的なサービス利用に努めることが求められる。

一方で、放課後等デイサービスの利用において、サービス内容が重要であること、特に、そこには、障害のある子どもの社会経験や人間関係、社会における理解を広げる役割が期待されていた。「障害への専門知識」も求められるものの、「子どもへの理解や子どもとよく関わってくれているか」、「子どもが多くの人と関わる機会を増やしているか」が、サービスの評価の視点となっている。放課後等デイサービスの利用は、家族支援の視点や専門的な療育の枠組みを超えて、障害のある子どもたちの社会経験や人間関係、社会における理解を広げる役割を実

感し、さらに期待している家族が多い。現在のようにサービスが充実する以前は、障害のある子どもたちの社会経験を広げる機会は、保護者や学校のみ任されてきた。習い事や塾など、健常児に比べて障害のある子どもに提供される機会は圧倒的に少ないことは明らかである。自由記述では、「サービス内容に納得できなかつたらやめるといった選択ができるようになった」という意見も挙げられた。放課後等デイサービスについては、サービス供給が過剰気味であるという指摘もなされるが、子ども自身、および家族にとって選択肢が増えていることは、一つの意義として評価しなければならない。ただし、選択できるということは、放課後等デイサービスだけでなく、放課後のさまざまな社会参加のかたち（習い事や塾等も踏まえて）が充実することこそ目指さねばならない。放課後等デイサービスは、保護者支援という意義も大きい「障害のある子どもを預かる」視点に偏りがちにもなる。さまざまな社会参加の形が、障害のある子ども、家族にもたらされるようにするにはどのような福祉サービス施策が必要なのか、さらなる検討が必要である。さらにスタッフの専門性の向上や就職後もずっと継続するような統一したサービスの提供、専門機関や他のサービスとの連携、家族への情報提供など、いまだ検討が必要な研究課題はたくさんあることも、今回のアンケート結果から伺える。様々な障害福祉サービスを、個々に応じて有効に活用し、支援していくためにも「スタッフへの信頼」はサービス評価の大きな視点である。スタッフの専門性の向上や他の専門機関との連携だけでなく、日頃から直接関わる子どもたちやその家族との関係づくりをしっかりとしていくこと、それがこれからの放課後等デイサービスの視点において重要だと考えた。

#### 4. おわりに

本稿では、放課後等デイサービスの利用者アンケートを通して、サービスが障害のある子どもやその家族にどのような役割を果たしているのかを検討した。アンケート結果を通して、サービス利用は子ども自身の育ちのためだけでなく、家族全体の日常生活のゆとりへとつながっていることがわかった。また放課後等デイサービスには障害のある子どもの



社会経験や人間関係を広げる体験、社会自体が障害のある子どもへの理解を広げる役割が期待されていた。さらに、卒業後も継続的にサービスを利用していきたいという願いがあることがわかった。今回は3つの事業所にアンケートを依頼し、多くが知的障害・発達障害のある子どものいる家族が回答者の多くをしめていた。障害によって、また年齢に応じて、サービスに対する考え方も変わってくるだろう。今後多様な視点から、さらに調査が実施されることを期待したい。そして、本アンケート調査が、今後の放課後等デイサービス、ならびに障害のある子どもの家族支援の充実の一助となれば幸いである。

### 謝辞

本アンケート調査の実施にご協力いただきました保護者ならびに、放課後等デイサービス利用者の皆

様に心から感謝いたします。また、アンケートの配布、回収にご協力いただきました、放課後等デイサービス事業者、スタッフの皆様に重ねて感謝申し上げます。

### 参考文献

- 田村光子 (2009) 「障害者の地域生活支援実践における課題—制度を超えたアプローチの視点から」 植草学園短期大学紀要10, pp.79-88.
- 田村光子, 太田俊己 (2006) 「障害者の地域生活を広げる新しい学びの場の必要性—障害者の学びの場へのニーズ調査から (特集 学びの広がり)」 千葉大学教育実践研究 (13), 1-9.
- 子どもの貧困白書編集委員会編 (2009) 『子どもの貧困白書』, 明石書店
- 厚生労働省 (2011) 「平成23年生活のしづらさなどに関する調査 (全国在宅障害児・者等実態調査)」 [http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu\\_chousa\\_ch\\_h23.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu_chousa_ch_h23.pdf) (2017.1.20参照)

